

殉教とか、生まれながらに心臓にナイフを突き立てられた子どもとか、そういったものからしかを意味を見いだせないのでしょうか。私たちには廢墟を嘆くなどということがそもそも許されていないのでしょうか。このようなかたちでしか私の祖父母は想起されないのでしょうか。

荒廢した夢からの覚醒

二〇〇九年一月二八日の『ル・モンド』紙に掲載されたイスラエル大統領宛の公開書簡のなかで、ジャン・モイーズ・ブレベルクは、一九四三年にトレブリンカで殺害された自分の祖父の名前をヤド・ヴァシエム「エルサレムにある国立ホロコースト博物館」のホロコースト記念碑から削除することを願い出しました。やや長くなりますが、その書簡を引用します。

ご理解ください。私は子どものときからずっとこれまで絶滅収容所のサヴァイヴァーらに囲まれて生きてきました。彼らから、腕に彫られた数字を見せられましたし、拷問を受けた話も聞かされました。耐え難いほどの悲しみを経験しましたし、悪夢も彼らとともに見ました。

私は学びました、こうした犯罪は二度と起きてはならないということを、民族や宗教などによって他人を侮蔑したり、基本的人権を他人から奪うといったことは、誰もけつしてしてはならないということ、そして同様に、誰もがきちんとした環境で生活を営み、家族のためによりよいものを望む権利を有しているということ。

大統領閣下、私は気がつきませんでした。国際社会によって数えきれないほど決議があげられたにもかかわらず、一九四八年以降パレスチナ人が明白な不正義を被ってきたにもかかわらず、オスロ合意に希望があったにもかかわらず、そしてパレスチナ自治政府側がイスラエルのユダヤ人に平和と安全のうちに生存する権利を繰り返し承認してきたにもかかわらず、歴代のイスラエル政府の唯一の回答は、野蛮な暴力の行使、流血、投獄、恒常的な占領支配、入植、土地の没収でした。

大統領閣下、お教えください。自国民に向けられたロケット攻撃や、多くの無辜の人びとに死をもたらす自爆攻撃から、ある国家が自衛をするということは正当なことなのでしょうか。私ならこう答えます。私の人間的な共感、犠牲者の国籍を問いません、と。

それに対してあなたが導いておられるのは、ユダヤ人全体を代表しようとするのみならず、国家社会主義「ナチス政権」の犠牲者の記憶を保持せよと主張している国家です。これは、私に衝撃を与えただけでなく、私には耐え難いことです。一方であなたは、私の最愛の人物の名前を、イスラエルの中心部にあるヤド・ヴァシエムに書き込んでおきつつ、イスラエル国家は、収容所に入れられていた私の家族の記憶を、シオニズムの鉄条網内に

人質として囲い込んでいます。権威を標榜しているけれども、日々不正義を繰り返している国家の人質とするために。

ですから、ユダヤ人の被った恐怖の証言者である私の祖父の名前を記念碑から削除することを大統領閣下にお願ひいたします。そうすることで、いまパレスチナ人たちに降りかかっている恐怖を正当化するために、祖父の名前がもう利用されないようにしたいのです。^{*29}

ユダヤ人たちはどこに属するのでしょうか。私たちの場所はどこにあるのでしょうか。ユダヤ人国家というゲット ^{ghetto}ででしょうか。そこでは境界線が狭まって行って、いつしか私たちは追放されてしまうかもしれません。権力はあっても強固なわけではないのです。ユダヤ人の権力は、ユダヤ人の強さではなく弱さなのです。というのも、信頼よりもむしろ不安を植えつけるために権力が使われているのですから。そしてそれゆえに、私たちが将来変わらなければ、いつしか権力が私たちを滅ぼすでしょうから。私たちは、ますます過去から切り離され宙吊りにされて、よりどころなく一人見捨てられていっているようです。そして、いまはそうでなくとも、いずれ繋がり ^{connection}と助けを切望するようになるでしょう。グロスマンはこう言いました。夢というのははかなく覚めるにつれて、力が弱まるのではなく、逆に、必死にそれにしがみつこうとするので、強くなるのだ——ただし荒廃した夢を食うようになるのだが、と。

私たちは、隔離壁の向こう側の土地と水を食い尽くし、鋼鉄のゲートでもって自分たち以外のすべての者を締め出しています。こうしていったいどんな場をつくろうというのでしょうか。私たちは結局のところ、「アメリカの作家で、ノーベル文学賞受賞者、ウィリアム・フォークナーの言う「墓場への侵入者」(Invader in the Dismal)」でしかなく、砂塵とともに空中に消える運命なのでしょうか。これがホロコースト以後における私たちの再生の限界なのでしょうか。

ユダヤ人の権力・主権と、ユダヤ人の倫理・精神的高潔さとは、このまま変革がなければ、両立は不可能であり折り合いがつかない、という考え方を私は受け入れるようになりました。というのも、子どもたちを理不尽に殺害することに公然と反対の声をあげることが、異議申し立てという正統かつ必要な行為ではなく、不忠の裏切り行為であるときみなされるのであれば、そして異議が無効なばかりか非難を集めてしまうのであれば、究極的に強いられる選択は、シオニズムかジュダイズムか、ということになります。

ラビの大ヒレルはずっと昔に「紀元前一世紀頃」、ユダヤ人の生活の中心として倫理を強調しました。倫理的な諸原則を守るかどうか、ユダヤ人の民としての生存か滅亡かを分けることになるだろう、と。ところが今日私たちが直面しているのは、どこか異なる事態、おそろくより歪んだ事態です。それは、私たちの倫理体系が消えてしまったということではなく、倫理が損なわれた何ものか、倫理が承認できない何ものかに書き換えられてしまったということです。

ホロコースト

から ガザへ

サラ・ロイ Sara Roy

パレスチナの政治経済学

岡真理＋小田切拓＋早尾貴紀 編訳



戸塚 ☎862-9411

横浜市立図書館



2043764252

青土社